

令和 6 年 4 月 19 日現在

機関番号：17102

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K20684

研究課題名（和文）現代アジアにおける菜食の実践と新たな道徳についての研究

研究課題名（英文）A Study on New Moral and Vegetarianism in Contemporary Asia

研究代表者

長谷 千代子（Nagatani, Chiyoko）

九州大学・比較社会文化研究院・准教授

研究者番号：20450207

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、現代アジアにおける菜食実践の広まり方、その背景にある伝統的思想の影響、今後新たに形成されうる普遍的道徳のあり方、それが社会を変革する可能性等について考察することであった。菜食実践の広まりとその背景思想については、主に文献・言説調査によって、古代から現在に至る流れを把握し、特に1990年代以降、欧米のヴィーガニズムとその背景をなす環境保護・動物愛護思想、台湾のいくつかの仏教集団による影響があることを確認した。今後の動向としては、環境保護や動物愛護のために禁欲的に肉食を控えるのではなく、おいしいものを食べたいという欲求と菜食実践を両立させようとする傾向が強いことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では菜食主義自体が学術的にまとまった形で論じられることが少なく、特にその東洋的伝統の概要をまとめたことに基礎研究的な意義があると考えられる。さらに世俗社会に対する宗教の影響を菜食実践の広まりという具体例に基づいて実証的に論じることに際しても、先駆的な役割を果たせたと思う。食の問題は健康・食糧危機・農業および畜産業などさまざまな面で重視されている問題であり、それを倫理・宗教・道徳といった観点で論じることで、社会におけるこの問題の議論に長期的視野と一つの方向性を示すことができる点に意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine the spread of vegetarian practices in contemporary Asia, the influence of traditional thought underlying this trend, the potential for the emergence of universal moral principles, and the possibility of their transformative effects on society. Regarding the spread of vegetarian practices and the underlying philosophical influences, primarily through literature and discourse analysis, we traced the evolution from ancient times to the present. Particularly since the 1990s, we confirmed the influence of environmental conservation and animal welfare ideologies, forming the background of veganism in the West, as well as the impact of several Buddhist groups in Taiwan. As for future trends, it became evident that there is a strong inclination towards reconciling the desire for delicious food with vegetarian practices, rather than abstaining from meat consumption solely for environmental or animal welfare reasons.

研究分野：文化人類学 宗教研究

キーワード：菜食主義 仏教 中国 日本 台湾

## 1. 研究開始当初の背景

申請者が1997年以来定点観測的なフィールドとしている雲南省の少数民族地域において、2010年頃から菜食主義の流行が一定程度見られるようになった。近代的菜食主義の流行は20世紀初頭以来、日本では何度か起こっているが、中国の特に少数民族地区での流行は珍しいものと感じられた。そこで少し背景を調べたところ、中国では1920年代頃に最初の菜食主義ブームがあったものの、その後は動乱の時代が続いたため、2010年頃からの流行が第二次ブームになること、日本よりも仏教的菜食主義が民間で比較的強く根付いていること、そこに台湾などの新仏教の菜食推進運動と、欧米のヴィーガン思想などが同時に流入して、今後の食のあり方について大きな議論が起こっていることを知り、こうした菜食実践の流行の実情と、その背景にある思想について調査することにした。

この問題は、近年の環境保護思想や動物愛護思想の高まり、農業危機や食料危機への不安、科学技術の発展による食文化の変化(培養肉、植物肉、昆虫食など)とも関連しており、中国だけの国内問題にとどまるものではない。そのため、申請者の主たるフィールドである中国と、出身国である日本に重点をおきながら、グローバルな課題であることを意識して研究を進めようと考えた。

## 2. 研究の目的

現代アジアにおいて菜食の実践がどのように広まり、その背景にある伝統的思想の影響を見極め、今後新たに如何なる普遍的道徳が形成され、それが社会を変革する可能性があるかについて考察することが目的であった。現在進行形で形成されつつある道徳とその具体的実践についての、文化人類学的研究である。特に注目するのは、仏教的な素食実践の基盤となる積徳思想(功徳を積んで来世の幸せを願う)と、アニミズム的思想(動植物にある種の人格を見出し尊重する)である。さらにこうした思想研究を、菜食の外食産業や食品販売、自然農法などの現実の展開と結びつけ、生活様式や産業のあり方を見直すうえでの見取り図となるような、現実的で総合的な研究に発展させたいと考えた。ただしこれは壮大な目的なので、萌芽の段階の3年間は、以下のことを具体的目標とした。

目標1. 仏教的な素食の実践が、その他のさまざまな菜食の実践の勢力図や歴史のなかで、どのような位置を占めるのかを見定める。

目標2. 異界(輪廻、後生など)の存在を想定し、功徳(陰徳)を積むという伝統的な積徳思想および、動植物の生命や人格を尊重するアニミズム的思想が、菜食実践者の思想にどれくらい影響しているかを見定める。

目標3. 積徳思想やアニミズム的思想の有無が、菜食実践の持続や展開と関連しているかどうかを見定める。

目標4. 積徳思想やアニミズム的思想に着目することの有効性を見極め、ほかの分野(経済学、生態学など)との共同研究の可能性を考えながら、研究の方向性を明確化する。

## 3. 研究の方法

研究方法について、当初は試行錯誤が続いたが、最終的に以下のような方法が固まってきた。まず、第三者による菜食論に関する研究論文、新聞・雑誌記事などの言説を収集し、ドキュメント分析を行うことで、菜食についてどのような議論が公的に行われているかを把握する。次に、菜食レストラン等についてのネット上の情報を集め、店の経営者やスタッフ、消費者などの一般の人々が、どのように菜食実践を認識しているかを把握する。第三に、菜食レストランや民宿経営者自身のライフヒストリーを収集し、個人レベルの菜食経験のなかから、菜食に関する倫理観や宗教観について深く掘り下げる。こうした3種類の質の異なる資料に対する分析結果を総合することによって、現代における人々の菜食に対するさまざまな考え方を多面的に明らかにするという調査の具体的な方針が固まった。

## 4. 研究成果

当初の目標に即して言うと、まず、中国においては仏教的な素食の実践がかなり根強い伝統となっていることが明らかになった。研究論文や雑誌・新聞記事では、新しい潮流としてのヴィーガニズムなどに注目が集まりやすくなるが、ネット上で北京、香港、重慶などいくつかの主要都市の452軒の菜食レストランを悉皆調査した結果、仏教的なイメージを明確に打ち出している店が4割近くあり、ヴィーガンは1割未満、その他は特に強いメッセージは確認できなかった。また、昆明、香港で店の雰囲気を見て回ったところ、布施の精神に則って民衆や貧しい労働者に安く菜食料理を提供するお店を仏教徒が中心になって運営している例が多数確認できた。

次に、アニミズム的思想や積徳思想の影響については、まだ十分に回答できる状況にはない。ただ、言説分析を通じて、仏教の中にある輪廻と慈悲の思想を、欧米のヴィーガンの動物愛護思想に匹敵するものとして再評価しようとする動きがあることが確認された。輪廻という概念は、共産主義思想を標榜する中華人民共和国においては長く非科学的な思想とされてきたが、菜食

実践という場においては評価されつつあることは、中国の宗教政策との折り合いの付け方という点で興味深い。

最後に、他の分野との関係で言えば、菜食実践というフィールドは、倫理学と生態学と宗教が交差する局面であるということ、調査を通じて実感した。人々は、そうした分野の概念を新しいやり方で組み合わせながら（例えば、仏教的な慈悲や輪廻を、生態学的な共生関係になぞらえて再解釈するなど）新しい生活様式や生き方の指針を創り出そうとしていると感じた。

この他、研究を進める過程でいくつかの課題が見つかった。一つは歴史の問題である。主に文献・言説調査によって、古代から現在に至る流れを把握し、特に1990年代以降、欧米のヴィーガニズムとその背景をなす環境保護・動物愛護思想、台湾のいくつかの仏教集団による影響があることを確認した。その前段階となる1920年代前後の第一次菜食主義ブームについても、意外とまとまった研究は少ないことも発見した。

もう一つは、禁欲に対する態度の変化である。多くの菜食実践者の間で、環境保護や動物愛護のために禁欲的に肉食を控えるのではなく、おいしいものを食べたいという欲求と菜食実践を両立させようとする傾向が強いことが明らかになった。その一方で、動物を食べることや自制できないことなどに対する、さまざまな罪悪感について語る声も耳に入って来る。禁欲と罪悪感というのも、新しい思想の動向をつかむカギになり得る概念として注目している。

日本では菜食主義自体が学術的にまとまった形で論じられること自体が少なく、特にその東洋的伝統の概要をまとめたことに基礎研究的な意義があると考えられる。さらに世俗社会に対する宗教の影響力を菜食実践の広まりという具体例に基づいて実証的に論じることにしても、先駆的な役割を果たせたと思う。食の問題は健康・食糧危機・農業および畜産業などさまざまな方面で重視されている問題であり、それを倫理・宗教・道徳といった観点で論じることで、社会におけるこの問題の議論に長期的視野と一つの方向性を示すことができる点に、本研究の意義があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 長谷千代子
2. 発表標題 経験と宗教：離見の見から考える
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Chiyoko Nagatani
2. 発表標題 Vegetarianism and Buddhist Culture: on Religious Discourse in Contemporary China
3. 学会等名 East Asian Anthropological Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷千代子
2. 発表標題 東アジアにおける菜食実践と宗教に関するドキュメント分析
3. 学会等名 西日本宗教学会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松本博之、関根康正編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 357
3. 書名 岩田慶治を読む 今こそ<自分子>への道を	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------